



生かされ、生きるチカラ。

「見る」とは「観る」という気づき。 感動が生きるチカラとなる。

春日部教会 矢川秀幸さん

矢川秀幸さんは、仕事中の事故で右腕と左手の二本の指を失ってしまった。食事や着衣、トイレさえままならない生活。自分の存在価値すらも見失いかけていたとき、立正佼成会春日部教会の看板に書かれた「生かされ、生きるチカラ。」という言葉に心惹かれ、立正佼成会の仲間の一員となった。当初は「仏さまが見たい」という純粋な思いだったが、いっそう見ることはできなかった。そこで目にしたのは、庭の花壇にそっと水を注ぐ人、誰も見ていない場所で静かに掃除をする人、ひたむきに生きる姿……どんな状況にあっても、誰もが仏さまに生かされている。仏さまはこの目で見られるのではなく、自分の心のなかにはいたのではないか。仲間との交流で得られた感動も、それを感じられる自分の心も、仏さまそのものだったのではないか。「見る」とは「観る」ことだと気づいた。日々の暮らしのなかで見逃してしまいそうなさやかなできごとのなかで、仏さまを観る。その感動がいま、矢川さんの生きるチカラとなっている。



見えないはたらきに気づく

「空気・心・ご縁」。この三つに共通することが何が、おわかりになるでしょうか。

一見、なんのつながりもなさそうですが、これらには次のような共通点があります。「実際に触れることも見ることもできないものでありながら、私たちが生きるうえで欠かせない大切なもの」これが答えです。ふだんはあまり気に留めることがないにもかかわらず、その存在の大切さに気づけば、感謝せずにはいられなくなるものといえるでしょう。心やご縁を具体的に考えてみても、たとえば親の恩やご先祖の徳、家族の思いやりや友人の気遣いなども、つい感謝を忘れてしまいがちな「目には見えない大切なもの」といえます。スイスの画家パウル・クレーは、「芸術は目に見えないものを見るようにする」といつていますが、宗教や信仰もまた「目に見えないものを見るようにする」ものです。正確にいえば、目には見えない心のありようや「いのち」の不思議・有り難さ、そして生命の尊さなど、人として生きるうえでほんとうに大事なことに気づかせてくれるきっかけを、宗教や信仰は与えてくれるのです。

立正佼成会